

芳賀 徹・平川祐弘・亀井俊介・小堀桂一郎 編

近代日本の思想と芸術 I

東京大学出版会

講座比較文学 3

近代日本の思想と芸術 I

目次

I 近代意識の発動

日本朱子学の発達と朝鮮・明との比較……………阿部吉雄 三

新井白石……………村上陽一郎 元

——日本における西歐観形成の一例——

古方家と蘭学……………富士川英郎 五

本居宣長……………子安宣邦 壹

——「物のあはれをしる心」——

吉田松陰……………鹿野政直 八

自叙伝の系譜……………筑波常治 一〇一

II 徳川文化と西歐世界

『ぎやどペかどる』にみるキリスト教の摂取……………沢井芳江 一三

『忠臣蔵』論……………ドナルド・キーン 一〇九
(井田 卓訳)

秋成とポー……………佐々木昭夫 一三三

与謝蕪村の小さな世界……………芳賀 徹 三二

——十八世紀日本文化史のなかでの考察——

『パミラ』と『梅暦』……………前田 愛 二五五

江戸後期とビーダーマイヤー……………富士川英郎 二六九

江戸芸術のマニエリスム……………由良 君美 二九七

——曾我蕭白のケース・スタディ——

歌舞伎とドイツ演劇……………小宮 曠 三三三

俳句・ハイカイ・エリユアール……………金子美都子 三三七

——比較詩法の試み——

あとがき

執筆者紹介

I
近代意識の発動

日本朱子学の発達と朝鮮・明との比較

一 日本朱子学の勃興と朝鮮との関係

阿部 吉雄

ふつうに、文祿慶長の役は焼物戦争、あるいは印刷革命の戦争と呼ばれている。日本の製陶技術、あるいは印刷技術は、この戦争を媒介として格段の進歩をとげた。ところで私は、この戦争は日本の思想革命を促したという仮説をたてている。戦争はまことにいまわしいものではあるが、文化の進展には実に意外な役割を果たすことがある。日本に朱子学の書物が伝わったのは鎌倉初期である。私の推定では、高麗王朝に朱子学が伝わった時より、ほぼ九〇年ほど早く日本に伝わっている。しかも高麗では、元王朝の文教政策の余波を受けて、すなわち一三一三年における科挙程式制定の影響を受けて朱子学が伝来したのに対して、日本では宋末元初の亡命僧や、鎌倉時代の求道僧によって、宋の禅学に附随して伝来した。このように日本には早く朱子学が輸入されたのであるが、鎌倉室町幕府の支持奨励したものは禅学であり、朝廷の保護したものは博士家の漢唐儒学であり、朱子学は爾来四百年もの長い間独立の地位を

占めることができなかった。とはいえ、五山の僧侶や、朝廷、博士家、武家の間には年を逐うて次第に関心を持たれるようになり、だんだん深く研究されるようになったことも事実である。しかし禅僧の間では儒仏一致という立場で、また博士家の間では朱子の新注と漢唐の古注を折衷するという立場で附随的に研究されるにすぎなかった。したがって朱子学関係書なども、江戸時代以前には一四八一年に桂庵禪師によって『大学章句』一書が刊行されただけであった。

しかるに高麗では、元より帰朝した儒臣たちが次第に勢力を占め、僧侶の勢を駆逐し、一三九二年、明王朝の後援を得て李氏朝鮮が成立するに及んで、ついに朱子学をもって国教となし強い排仏政策をとるに至った。そうして平和が続き世宗、成宗のような好学の賢君が相繼いで現われたので、宋明の儒書、史書なども盛んに出版され、儒学思想の研究も次第に深くなり、ついに李退溪（一五〇一—一五七〇）、李栗谷（一五三六—一五七九）のような大儒も現われるに至った。文祿慶長の役（一五九二—一五九七—一五九七—一五九七）以前に、どのような宋明儒書が朝鮮で刊行されていたか、幸いに魚叔権の『攷事撮要』の冊版目録によって知ることができる（『東洋学報』三十卷二号所載）。これによって見れば、日鮮両国の文化水準は、少なくとも出版文化の側面に関してはかなりの隔りがあったことがわかる。ところがこの戦役によって多量の唐本韓本の儒書が日本にもたらされた。日本朱子学派の開祖、藤原惺窩（一五六一—一六一九）や林羅山（一五八三—一六五七）はこれを食るように読破した。そのことが彼らをして仏教と対決し、さらに博士家の新古注折衷学と対決し、独立の新儒学を唱道させる直接の原因になったと私は推定している。それを実証するに当っては、惺窩、羅山の思想遍歴の過程やその読過した書物を詳しく研究し、一方内閣文庫等に現存する羅山らの遺沢書を調査するという方法を用いたのである。

藤原惺高と朝鮮

藤原惺高は、有名な藤原定家十二世の孫で名門の生まれであるが、幼少の時から播州竜野の景雲寺で禅僧となつて修業した。十八歳の時、生家は兵火をうけて没落したので、相国寺の僧となつて儒仏の学を修め、特に老莊を好み、陶淵明の詩を愛した。ところが三十歳の時、たまたま朝鮮使節の一行が大徳寺に逗留したので彼は詩文の贈答に出向き、はからずも許篈(号は岳麓、また山前)を知り、心から尊敬するようになった。彼は許岳麓から、儒教と仏教とは断じて相容れないものであるという、長文の「柴立子説」という、惺高自身の名号説を示され、大いに心を動かされたものらしい。次第に禅語を好まぬようになった。これが彼の心を儒学に向ける第一の機縁になったものと思われる。なお、許岳麓の兄弟姉妹四人とも、朝鮮文学史上顕著な足跡を残した人であるということは、林羅山以来、許岳麓の名を誤つて伝えたために知られていないことである。やがて文祿の役が起こると、彼は秀吉の本陣肥前名護屋に赴き、明の媾和使、徐一貫らと筆語し、また徳川家康に招かれて江戸に到り『貞観政要』の講義をなした。学僧としての令名が次第にあがったのであろう。かくて三十四歳の時には相国寺から縁を絶たれ、もっぱらもと播州竜野の城主であり、その時竹田城主であつた赤松広通の保護をうけるようになった。彼が朱子学の本を読み出したのは、おそらくその頃からで、慶長元年三十六歳の時、吉田意庵のために記した「古今医案序」を見ると、明らかに朱子の『小学』を讀んでいる証拠があり、しかも「惺斎・斂夫・以肅」という名号で書かれている。この名号は、私見では朱子学の根本的な思想である「敬」の定義に由来するものであつて、宋の謝上蔡が、敬は「常惺惺の法」(心を常にめざめさせる法)といい、尹和靖が「其の心収斂して一物を容れず」(心をひきしめて一物をも容れぬ心的情態)といい、また(程伊川が「整齐嚴肅」(身をきちっと整え厳しくすること)と定義したことに基づいて、惺・斂・肅の一字を取つて自ら名乗り出したものと思われる。すなわち彼の名号は、宋学の「敬」の哲学に共鳴し自覚した結果名乗り出された

ものと思われる。もしそうだとすると、この時にはもはや儒僧という意識を脱却しかけていることがわかる。しかしまだ、旧来の博士家の漢唐の儒学や、仏教に対決しようとする決心をなすまでには到らなかった。この決心を起こすのは、朝鮮の捕虜、姜沆（一五六七—一六一八）と親交を結び、その激励を受けた慶長四、五年、彼の三十九、四十歳の時であったと推定される。この時こそ、彼の思想の大転換期であった。

姜沆は朝鮮の博士で、官は工刑曹佐郎にのぼり、朱子学の素養も確かな能文家、能筆家であった。慶長二年、妻子兄弟もろとも捕虜となり、伊予の大洲に抑留され、ついで伏見城に移された。惺窩が彼と交わったのは僅か一年半にすぎなかったが、互いに尊敬しあい、その間いろいろの仕事を頼み、また指導をうけた。第一に、『四書』『五経』および『曲礼全経』『小学』『近思録』『近思統録』『近思別録』『通書』『正蒙』『経世書』等の性理学諸書の大字本、小字本の二種類の筆写を依頼し、大字本は自己の訓点改刻の資とし、小字本は赤松広通の許に献じた。惺窩は当時、『四書』『五経』の全部にわたって、古来の博士家の和訓を改め、朱子新注によって新たに解説し、これを出版しようとする野心に燃えていた。博士家の漢唐儒学に対決して、新たに宋明の儒学を唱道しようとする強い決心を抱いていた。そうしてその決心を姜沆に語り、あらかじめその跋文を書いてもらった。それが『惺窩文集』に見える「姜沆に問う」という文章と、姜沆の「五経跋」という文章である。この二つの文章は、古来の儒学を否定し新儒学を唱道した宣言書のようなものであるが、不幸にしてこの出版事業は、その援護者であった赤松広通の死によって挫折せざるをえなかった。なお、小字本の『四書』『五経』と性理学諸書二十一冊が、今なお内閣文庫に残っていることを先年見つけて紹介した。惺窩の写させた原本は、おそらく朝鮮からの戦利品であったと思われる。

第二に、惺窩は姜沆に、前記の「五経跋」のほか、「文章達徳録序」を記してもらい、自己の出版しようとする著書の序跋を依頼した。また「是尚窩記」「惺齋記」という、自己の名号記を記してもらった。これは姜沆を信頼し尊

敬したからであり、当時彼と志を語る師友とて他になかったからであろう。第三に、姜沆に孔子祭の実習指導をしてもらい、また文官登用試験、経筵講義、衣服飲食の制度などを尋ねた。彼が姜沆の帰国したその年、関が原の戦役の直後、すなわち慶長五（一六〇〇）年十月に徳川家康に招かれて、『漢書』、『十七史詳節』を講義したとき、それまで身にまとうていた僧衣を脱ぎ捨て、深衣道服という異様な儒服をつけて家康の前に出で、側近の学僧たちに論難されたが、その儒服なるものも、おそらく姜沆との交遊中に身につけていたものと推察される節がある。

惺窩にとっては、彼の儒学独立の志を援助した赤松広通と、姜沆はついに忘れえぬ人である。彼は「赤松氏を悼む三十首」の中に次のように記している。

（赤松氏は）朝鮮の刑部員外郎たりし博士姜沆に、五経四書などの道伝られて後、絶て久しき積奠の式、試料のさま、とりいとなませみ侍り。この国にも、あがりての世には、さかりに行れしにや。菅右相道真公の遺稿にも、おほく書のせられけり。彼博士のいひけらく、戦国のうちにて、かかるころざしのおはする、これなん膝の文公のためしおもひいでられて、時に垂聖の才のなきのみぞ、いとほひなからずばあらずとぞ感じあへりける。おほくの文のをくに、かく言かき記しとめて、おのがもとつ国にかへりにし。

学ぶとておしみしひまのこま人の

筆のあとのみ名はのこりつゝ、

天下分け目の戦といわれる関が原の戦の年は、思想史の上でも記念すべき年で、この時惺窩は初めて公然と還俗を表明し、独立の儒者として立った。朝廷の権威を背景とする博士家の学や、幕府の権威を背景としてきた五山の学問

と公然と対決し、博士家にも寺院にも属しない一個独立の儒者として新儒学を唱道したのである。これより学問、思想、教育が宗教の支配する寺院から解放され、因襲的、閉鎖的な博士家の手から離脱する端緒が開かれた。そうして惺窩が断乎としてこの仕事をなしたげたのは、種々の客観的条件も伴ったことであるが、先には許岳麓の誘発、後には姜沆の激励を受けたこと、および朝鮮よりもたらされた多量の書を読むことができたからであろうと推定される。

惺窩には、自らいうように幼より師はなかった。その読んだ図書がその師であった。ではどういう儒書を読んだかという点、当時の情況から察して朝鮮渡来の書が多くを占めていたと思われる。中でも彼がもっとも尊信した書は朱子の編した『延平答問』であった。ところがこの本は、朝鮮の李退溪が心をこめて校刻し跋文を附した朝鮮将来本であるということが、林羅山の手写本が内閣文庫に現存しているということによって証明することができる。慶長十一年、彼の門人となった最愛の弟子、林羅山が江戸に下ろうとする時、彼はこの『延平答問』を、あだかも自ら体得した儒学の蘊奥を授けるといふ心で伝授している。全国、万人、万世の幸不幸にかかわる問題としてこの書の熟読を勧め、かつこの書に説く、静坐して未発の中を養うという修養法は、一変すれば禅と同じことになるから、先儒のいう誠敬の工夫を徹底的に積み重ね、洒落しやらくの境地に到達すべきであると教えている。彼が当時、林道春を羅浮山人、羅浮洞と称したが、その出典は実はこの書の中にあり、道春はついに自ら羅山と名乗るようになったことを見ても、彼がどのようにこの書を尊重したかということがわかる。なお洒落の境地——身も心も雨のはれあがった月のようにサッパリとした境地に到達することは、李延平のめざしたところであり、同時に惺窩の理想となしたところである。後世、江戸文学で洒落女、洒落本などと洒落の漢字が盛んに用いられ、ついに洒落れるという日常語までできるようになったが、その源はここにあることもわかって興味がある。

仏教を排斥した彼は、当然朱子の理気哲学をもっとも合理的な哲学として信奉した。その哲学を奉ずるに当って、

もっともこの『延平答問』と、朝鮮の李退溪の『天命図説』に得るところがあったらうということも実証できるのである。その他、いろいろ綜合して考えると、彼が朝鮮の学者や朝鮮渡来の図書から受けた影響は、従来考えられてきたよりも遙かに大きいといえると思う。

林羅山と朝鮮

林羅山は京都の浪人の子、幼より建仁寺で唐宋詩文の学を習い、ついで史書、經書を独学した。その著『野槌』によれば十八歳の時、彼は初めて朱子の『論語集注』を読み、二十一歳には京都でその公開講義をなし、世の物議をかもしている。十八歳の時は、あだかも慶長五年で、かの藤原惺窩が僧衣を儒服に着換え、還俗を表明した時に当っている。二十二歳の時、彼は藤原惺窩に堂々たる書翰を送り、惺窩が儒服をつけて世に立ったことを「わが国儒学の濫觴」として激賞するとともに、その陽に朱子学を信じながら陰に陸象山の説を信ずる態度を非難し、また激しく仏教を攻撃した。かくて往復論弁したが、確かに羅山の指摘する通り、惺窩の学問は朱子陸子を包容し、仏教排撃も微温的であった。陸象山、王陽明の説に対して包容的であるか、排撃的であるかという点は、惺窩と羅山の学風の重要な相違点であるが、その相違がこの書翰にはっきりと示されている。しかし羅山はついに惺窩の門に入って師弟の礼を結ぶにいたった。

羅山が惺窩の門に入る時、それまで読んだ和漢朝鮮の本、四百四十余部の書目を作っている。それを見ると、彼がいかに超人的な読書家であったかということに驚嘆するのであるが、私はこの書目を、内閣文庫に残る羅山旧蔵書と、朝鮮の『攷事撮要』の冊板目録とを照合して、この中に朝鮮系統の本がどの程度に含まれているかを調査し推定した。その結果、種々興味ある事実を知ることができたのであるが、一つの重要なことは、羅山が宋元明の儒者の主著、解

説書の類を、多く朝鮮翻刻本で読んでいるということである。とくに仏教や陸王学排斥の強い主張をもった明代の『学葩通弁』『異端弁正』『困知記』等や、また朱子の窮理学をおし進めた宋の陳淳の『性理字義』等の解説書はみな朝鮮本で読んでいる証拠があげられる。これらの本は、彼の思想的立場を決定する種本となったものであった。朝鮮は朱子学一色の国で、仏教や陸王学を排斥した国である。したがってそういう種類の宋明の儒書だけを出版し、また朝鮮の儒者自身もそういう異端排斥の主張をなした。羅山は惺窩の門に入る前に、こういう種類の本を多く読んだ。だからこそ激しく仏教を排撃し、陸王学をそしり、惺窩の朱子陸子包容の学風とさえ対決し、朱子学一尊主義の主張をなしたのであると思う。彼は惺窩の門に入る前後に、建仁寺兩足院の梅仙から、新古注折衷の大成者、清原宣賢の学問を伝え受けたし、吉田兼俱の吉田神道を伝承したし、また五山の儒仏一致の学にも接したが、ただそれだけでは彼の朱子学一尊主義や、異学排斥の強い主張は生まれてこなかったと思う。ふつうに羅山は、惺窩から朱子学の伝授を受けたように考えがちであるが、惺窩の門人となる前に、すでにその思想的立場は決定していたのである。しかもその源は朝鮮伝来の図書であったことを知ることができる。

羅山は中国朝鮮の近世文化を、いち早く受容し紹介し、江戸時代の文芸復興の基礎を造った代表的な人物である。彼は幕府の枢要な地位におり、これまでの仏教文化の幕を閉じ、新たに儒教文化を展開させた中心の人物であった。しかし彼はたんに新儒教を唱えて思想界の指導権を仏教から奪い取るうとしただけでなく、知識文化の各分野にわたって数々の草分け的な仕事をなした。しかも、そういう仕事をなしたことができたのは、少なくともその初めは朝鮮渡来の唐本韓本を多く読むことができたからであると思う。たとえば文芸の分野についていえば、彼は二十一歳の時に、朝鮮で注釈された『剪燈新話句解』を読んで朱点をつけた。この朝鮮版が元になって後に和刻本が出版され、怪談小説流行の発端を開くようになるのであるが、羅山自身も怪談を書いたらしい。年譜の寛永末年の条に、

將軍家光が病床にあったとき、そのつれづれを慰めるために、『仙鬼狐談』三卷、『恠談』二卷を書いたと見えるが、これはおそらく『剪燈新話』の翻訳ではなかったかと想像される。林羅山の著として、元禄時代に『恠談全書』が出版されており、それは羅山の名に托したものらしいが、彼は恠談小説とは無関係ではなく、むしろ先鞭をつけた人として考えられるのである。また彼は朝鮮本から『棠陰比事』を写して、その講義をなし「諺解」を作った。それが元になって、慶安・寛文になって『棠陰比事物語』として和訳刊行され、日本の裁判小説の起源となり、法医学の祖となったという。羅山の読んだ原本は、ともに内閣文庫に所蔵されている。羅山の著書は、詩文集百五十卷、編著書百四十余種八百四十余卷、訓点本三十余種に及ぶといわれるが、これを細かに見れば、朝鮮渡来の図書と関係あるものが、かなりの数にのぼると想像されるのである。私は、林羅山ほど多量の朝鮮本を読んだ学者は、江戸時代三百年を通じて他になかったと推定している。

このように考えてみると、日本近世儒学を開き、日本の文芸復興の先声をあげた藤原惺窩の直接の師は朝鮮渡来の儒書と捕虜の姜沆であり、林羅山もまた朝鮮渡来の図書に得るところが大であったといつてよい。彼らは五山伝来の宋学研究の成果を承け伝え、そのうえに朝鮮渡来の図書を多く読む機会を得たので初めて思想革新をなしとげることができたのである。惺窩は姜沆と交わり朝鮮渡来の儒書を読むことよって、ついに仏学と訣別して新儒学を唱出し、羅山は朝鮮渡来の儒書を読むことよって、ついに惺窩の朱陸一致の学風と対決し朱子学一尊主義を唱え出し、また学問の各分野にわたって新生面を開くことができたのである。これらの点はこれまで必ずしも明らかにされなかったところであった。